

建康石頭城と洛陽金〔ヨウ〕城：都市空間と防衛構想に触れて

著者	塩沢 裕仁
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	51
ページ	34-65
発行年	1999-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10584

建康石頭城と洛陽金墉城

——都市空間と防衛構想に触れて——

はじめに

三国呉・東晋・宋・齊・梁・陳六朝の首都建康（呉では建業、現江蘇省南京市）と三国魏・晋・北魏三朝の首都洛陽（現河南省洛陽市）には、それぞれ防衛の中心となる施設が存在する。建康の施設を石頭城、洛陽の施設を金墉城という。両者はともに大城に隣接して設けられており、都市平面プラン上極めて類似した形態をもつ。また、ほぼ同時期に築造され（石頭城は呉の孫権へ位二二二～二五二）、金墉城は魏の明帝へ位二二六～二三九）、建康・洛陽という都市の崩壊後もそれぞれ旧地の拠点（州府など）として使用されるという類似点もあった。このような類似性を有する石頭城・金墉城という防衛施設の存在そのもの

塩 沢 裕 仁

は従来より知られていたが、その機能性についてはほとんど議論されてこなかった。都市は時間軸・空間軸において絶えず変化を遂げる生き物であり、そこには人々が住み、生活を営み、盛衰を繰り返す。故に、都市の成立から消滅に至るまでの時間軸を設定し、その一つ一つの座標において展開される空間上でのあり方を調べることから、都市の移り変わりの様相を見ていく必要がある。本稿では、石頭城・金墉城の機能面での分析を通じて、政治環境・自然環境の大きく異なる建康と洛陽という二つの都市（首都）に類似性をもつ防衛施設が存在する意味を、都市空間との関係において考えるとともに、都市の推移と密接な関係を有する防衛問題を考えることによって、建康、洛陽という歴史的な都市の生態の一面を究明していきたいと思う。

なお、本稿にいう大城とは、内城（宮城）のさらに外側を取り囲む堅固な城壁（洛陽の場合は周約三〇里、建康の場合は周約二〇里^③）、およびその内部空間を指して用いる。北魏の洛陽城では、大城の外側にさらに外郭が成立する。また都市という表現については、大城の外に展開する居住空間をも含めて使用する。したがって、首都たる都市の境域（都市の内外を空間的に区切る境界域を示す）内が本稿で使用する都城である^④。

一、建康の時代的推移と防衛構想

（一）都市の発展性

建康では周知のごとく大城の外に居住区や商業区が展開し、多くの官署もまた大城の外に営まれた。しかしながら、何故に市街地が大城の外に成立し発展していったのかという議論は、決して多いとはいえない。ところが、建康の都市プラン（時間的、空間的な都市構造）を考える上に、この問題は最も重要である。そしてまた、市街地が大城の外に展開される都市をどのように防衛するのかという課題が、石頭城の機能性をめぐる問題を規定していることも確かである。したがって、まず最初に建康という都市が大城の外へ展開・拡大して行った要因を考えておきたい。

その考察の方法としては、都市の生態をとらえるという視点から、時間的な変化と空間的な都市構造の変化を観察することはもちろんのこと、建康の首都としての特異性に注目していきたいと思う。なぜならば、次に述べるような従来の王朝の首都にはみられない特異な点を、建康が数多く有しているからである。まず第一に、都市全体を囲む城壁が存在しない。建康の市街地地域は多くの籬門^⑤を設け、これを空間的に結ぶことで都市の境域を示しており、従来の中国の都市が堅固な城壁によって都市全域を囲み都市プランを完結させるのとは全く様相が異なっている。その他、長安、洛陽とは異なり統一王朝の首都ではなかったという点、貴族制という社会構造をもつ都市であるという点、そして江南にあるという自然環境と地域性などが考えられる。このような首都としての特異性を考えることによって、建康という都市の生態の一面をより明らかにすることが出来ると思う。

右の考察方法、すなわち時間的・空間的な変化の中で建康の首都としての特異性を考え合わせることから導き出した大城外への発展性の要因は、以下の四点に要約することが出来る。

（一）呉・東晋ともに一將軍府から発生したという発生

段階での事情と慢性的財政難の問題。

当初創られた呉の建業城は、周二十里一十九步で土牆竹籬をもって築かれていた。⁽¹⁾これは長沙桓王(孫策)の將軍故府を基礎とし、これを囲んで大城としたもので、武昌宮や鄴北城などと比較しても、呉足利時としては妥当な規模であったといえる。晋の司馬懿(元帝、位三一七〜三二三)が安東將軍府をおいたのも呉の旧基の上である。⁽¹⁰⁾蘇峻の乱によって宮城は焼失し、大城内の苑城の地に新築・移転されるが、財政的な問題があつて大城の拡張は行われていない。⁽¹¹⁾したがつて、諸機關の増設、居住区域などは当然大城外に求められることになる。

(2) 一 地方政權から王朝への成長と都市化の加速。

王朝の首都という性格は、住民の増加と商業の集中を加速させる。ところが「主弱臣強」の体質により統治機構内に諸々の矛盾を抱えることから、大城内の整備は遅延として進まず、市街化地域の發展、展開のスピードの方が勝っていた。⁽¹²⁾大城の外側に一旦成立した広域な市街地を整理して長安・洛陽規模の大城を築くことは大規模な事業となる。財政問題とともに、山水に富む自然環境は防御性にも卓れていたことから、大

城の大規模な拡張は急務とされなかった。

(3) 貴族制社会の堅持により政權の虚弱體質化と貴族の独立性がはかられる。

貴族、豪族は独自の勢力堅持とともに自らの邸宅と莊園経営に専念する。邸宅を営むには手狭な大城内では制約があり、皇帝權力と対峙するという意味合いもあつたと考えられる。貴族達は独自に居住区を形成していき、それとともに一般の居住区・商業区は別の区域に成立する。この点は次節で触れるが、所謂住み分けもまた形成されていく。皇帝權力の側では大城内に堅固な防衛(大城の磚牆化と三重の宮牆)⁽¹³⁾を求める方向へ向かい、その一方で私的部曲を擁する貴族の邸宅が集中する鍾山などの地域は、一つの独立した都市空間を形成していた。宮城に対して疎遠なる空間の成立という視点も可能になる。

(4) 長期的・継続的に首都機能を有した反面、内乱が多発する。

度重なる内乱による被害は大城内の充実・發展を阻害した。当然のことながら、内乱は内部での抗争であるから得るものではなく、無駄な消費である。したがって、皇帝側は慢性的な財政難を強いられる結果とな

る。都市全体も一時的には被害を被るが、居住区・商業区は建康が継続的に首都機能を有していたことから、復興のスピードが速く、被害からの立ち直りの遅い大城内に比べ、発展性・回復性という面ではるかに勝っていた。また、その発展性・回復性を支えることの出来る土地の生産力の卓越性が江南地域にはあった。

(二) 都市の様相（平面プラン上での認識）

大城の外に拡大・発展していった建康の都市としての様相とは如何なるものか。防衛構想の議論に入る前に、その構想の前提となる都市の様相について簡単にみておきたいと思う。⁽¹⁾なお、都市の様相を知る上で都市平面図は不可欠なものである。しかしながら、建康については現在南京市街地がその直上に営まれていることもあり、考古学的な調査がほとんど行われていないという状況にある。それ故に、宮城と大城の位置と形態に関する議論をはじめとして、都市平面図には諸氏の議論があって一定していない。本稿の主眼は、大城の外に拡大・発展した市街地を含めた建康という都市全体の様相を理解することにある。したがって、大城とその内部に関する議論は別稿を期すことと

し、作図の留意点と根拠を付した建康の都市平面図（試案、図一）を作成し、以下これを以て考察を進めていく。都市の様相に議論を戻すが、まず最初に確認しておくべき点は、市街地化された地域を含む建康全体の都市としての境域である。『太平御覧』巻一九七居処部二七に引く「南朝宮苑記」には、

建康籬門舊南北兩岸籬門五十六所、蓋京邑之郊門也。

如長安東都門亦周之、郊門江左初立並用籬爲之故曰籬門。南籬門在國門西、三橋籬門在今光宅寺側、東籬門本名肇建籬門在古肇建市之東、北籬門今覆舟東頭玄武湖東南角、今見有亭名籬門亭、西籬門在石頭城東、護軍府在西籬門外路北、白楊籬門外有石井籬門。

と五十六カ所の籬門の存在と主要な籬門の位置が示されている。これは東晋の初めのころの建康（京邑、京師とも記される）の郊を示すものである。一方、梁代の建康の境域について『太平寰宇記』巻九〇江南東道二昇州に引く「金陵記」には、

梁都之時、城中二十八萬餘戸、西至石頭城、東至倪塘、南至石子崗、北過莊山、東西南北各四十里。

と、石頭城（西）、倪塘（東、現義塘付近）、石子崗（南、現雨月台）、莊山（北、蔣山、現鍾山西峰）を挙げ、東西

図一作図上の主な留意点

- i. 研究史にみる主な都市プラン（日中研究者の都市プラン、注14）
 - i. 朱棣氏は大城の四至を、南：乾陀河、北：北極閣の下で臨鳴寺の前、西：中山道の西、東：成賢街と想定し、そこに方形の大城（内にも方形の宮城をもつ）とその中央をまっすぐ南に延びる御道を配する。以後中国（台湾を含む）における多くの研究成果は朱氏のプランを基本的に踏襲している。厳密な史料分析による復元ではあるが、仮定としつつも方形が強調されている点や主軸の位置にも議論の余地がある。
 - ii. 秋山日出夫氏は洛陽のプランを建康に役替する。方法論的に現状の地形と洛陽のプランを意欲しすぎている点で問題がある。大城の外側に外郭を想定したプランは境域を考える上で重要である。
 - iii. 中村圭輔氏は水系に沿って大城のプランを復元する。当時の水系が正確に把握されるならば中村氏のプランが最も支持されるものとなる。しかし、長江河道の西移をはじめ水系の変化が著しいことから問題も残る。

以上、中国側の方形プランに対し、日本側の不整形プランという相異点が認められる。大城が土牆であるとすれば、曲線による不整形という見方を支持すべきである。図一では方法論的に賛同するところの多い中村氏のプランを参考に若干東西・南北の幅を修正して大城を想定している。

2. 現存する遺構

現在の臨鳴寺の南側、東南大学の北側、明清代の城牆の下面に六朝城基が確認されている。碑刻の長さ48cm、幅23cm、厚さ10cm、残長は200m前後である。この遺構が大城の城牆であるか宮城の牆垣であるかについては、なお議論が割れる（注19）。

3. 自然地形

五代の頃長江河道が西に大きく移動する。また水位の変化による玄武湖（周40里）・燕雀湖（周2里）・蘇峻湖（周10里）・迎鐘湖・張陳湖等の縮小消滅、南唐・明の土木工事による青溪・潮溝・運渚等の水路の変化にも注意が必要である。故にまず丘陵との位置関係を決定することが肝要である。なお地理学諸兄の助言では、図一の右下、左上の丘陵間は氾濫原の低湿地であり、水害の危険性も高い居住区としては好ましくないとのこと。玄武湖の西側も旧湖沼もしくは旧湿地帯であるという。さらに秦淮河の現中書門前の屈曲部は人工的なものであるというが、管見の範囲では当該期の史料に該当する開鑿の記事はない。なお、南京の都市の主軸が右に約15度振れている。これは建康の主軸の振れと考えられる。

4. 墓葬との位置関係

墓葬の位置は都市の境域を考える上に重要な指標となる。現状では秦淮河南岸の丘陵間、臨龍山の西、覆舟山の南・東、鍾阜門の東北、清涼山の東及び現市街地の外側の丘陵地帯に主に分布している（注19）。市街地での分布状況は文献とも符合し、大城の外側にして境域ラインの近傍にあると想定している。

5. 武昌、京口との比較

建康の大城は呉の大城の旧基に基づく。孫呉の遷都の経緯を念頭に置くと、すでに発掘調査が行われた武昌（現鄂城市）・京口（現鎮江市）の規模は比較に値すべき資料となる。京口は東面700m、南面1200m、西面1400m、北面1400m、周4700mの隅丸不整形であり（注32）、石頭城の形態に類似する鉄甌城の存在が目される。武昌は南北1km、東西2km、北面が長江により削られている。周囲には護城河が造られ、現状では全周6kmの隅丸長方形である（注8）。両者とも土牆であり直線の部分は殆どない。以上のデータからみると建康の周二十里一十九歩（8710.7m、魏尺の一里を434.16m、一步を1.4472mで計算する）は妥当な規模といえる。規模の面では鄂城も比較の対象となる（注9）。

6. 藩門と境域（本文第一章第二節）

「太平御覽」巻197の解釈による。藩門はほぼ明代の外郭に沿うことが想定されることから、江岸より倪塘（幾塘）までこれを使用する。倪塘を東端とし東府の東に藩門がある（表1）ことから、鐘山の南麓より燕雀湖の西岸（明宮城東側）を抜けて覆舟山東の北藩門に至る。北側は玄武湖の南岸に沿い臨龍山北麓より西は倪塘間を抜けて石頭城の北側に至る。李の存在、上林苑等の禁苑の性格及び境域との位置関係をも含め、藩門の位置は今後さらに検討が必要な課題である。

※ 図一は同一平面上に東晋・南朝期270年間の平面プランを想定したものである。なお、図中の太実線は大城・宮城・境域のラインを、細実線は石頭城・東府城等の城壁を、……は水渠を、---は江岸のラインを示す。また城牆間を結ぶ直線はゾーンのラインを示している。さらに●は墓葬を、×は湖沼を示す。

図一では、地形を詳しく読み取るため、等高線が細かく現在より開発が進んでいない昭和7年陸地測量部発行の二万五千分の一南京近傍圖（『近代中国都市地図集成』柏書房、1986、所収）を原図とした。また新亭に当たる部分の欠落は中国大陸五分の一地図及びランドサット衛星写真等を参考に筆者が加筆したものである。

・南北各四〇里と明記している。「南朝宮苑記」の藩門を結んだ線と「金陵記」のラインとはほぼ一致している（若干東側がずれる）。東晋の初めに藩門を設定したとき、それはあくまで郊であって、市街化地域がそこまで発展していたとは思われないが、梁代でもそれが一つの都市の境域として認識され、大城の外への発展はその境域内で展開されていたと考えることが出来る。すなわち、建康では大城の外に市街地が積極的に展開していることから、その都市

の内外の境を示すのが郊門であり、郊門の外が市外、内側が市内（京邑、京師）であった。市内には秦淮河を挟んで北岸に建康縣、南岸に秣陵縣が設けられ、行政上都市の境域が二分されていた。⁽¹⁵⁾そして境域内には里巷制が敷かれていた。現在、北岸十一、南岸十一、その他九の計三十一の里名が確認されている。⁽¹⁶⁾

人口は先の「金陵記」によると、最も繁栄した梁代で約一四〇万人（一戸五人×二十八万戸で試算）である。その

図一 建康の都市平面図



建康石頭城と洛陽金墪城（盧氏）

長江

人口構成はというと、『隋書』卷三二地理志下に、

丹陽舊京所在、人物本盛、小人率多商販、君子資於官祿、市廛列肆、埒於二京、人雜五方、故俗頗相類。

とみえ、在京の民が君子と小人、すなわち王公貴族官僚（その家族）と一般平民に分けられ、平民は大多数が商販である。また、平民が農民でないことは『宋書』卷五四孔靈符伝に「京師無田」と記されることからも理解される。その他、平民と雑居して貴族の部曲、僧侶が多く住んでいる。王公貴族は『建康実録』卷二に引く陶季直「京都記」に、

典午時、京師鼎族多在青溪左及潮溝北。

とみえるように、宮城の東、潮溝から青溪にかけての一带に集中している。一方、大量の平民は『建康実録』卷二に引く「丹陽記」に、

建康南五里有山岡、其間平地、民庶雜居。

とみえ、また『南齊書』卷一九五行志には、

（永元）二年冬、京師民間相驚云、當行火災、南岸人家往往於籬間得布火纏者、云公家以此禮之。

とあり、また『陳書』卷一二徐度伝には、

市廛民居、竝在南路、去臺遙遠。

とみえるように、秦淮河の南岸に居住区を形成している。

さらにまた、北岸の御道の左右には『梁書』卷九曹景宗伝に、

御道左右、莫非富室。

とみえ、富人の住居が集中していた。このように貴賤と貧富の二構造から住み分けが判然としていた点は注目すべきである。この住み分けのあり方は一時期の様相を平面の上でとらえたものであるが、劉淑芬氏は貴族の園宅の移り変わりを分析し、呉では南岸に、東晋では南北両岸に、そして宋以降は北岸にと転移していることから、貴族と平民の居住区の分離が時代の推移とともに進み、それが貴族制の発展に伴う社会構造上の貴賤の分離を示すものであると理解している⁽¹⁾。戦乱の多発と復興を重ねる都市化の現象の一つとして重要な見解である。

また、先の人口構成における商販が平民人口の多くを占めていたことに結び付く点として、大小市場が大城の内外をとわず多数設置されていた点が注目される。『太平御覧』卷八二七資産部七に引く山謙之「丹陽記」には、

京師四市、建康大市、孫權所立、建康東市、同時立、建康北市、永安中立、秣陵闢場市、隆安中發樂營人交易、因成市也。

と四市の存在が示され、『隋書』卷二四食貨志からは、淮水北有大市百餘、小市十餘所。

と少なくとも十カ所以上の小市の存在が確認される。また大市・小市以外にも草市・紗市・牛馬市・穀市・蜆市・塩市・苑市など多彩な市の設置が知られている。⁽¹⁸⁾それらは秦淮河の南北にかなり不規則に成立していた。

秦淮河の岸边には『南史』巻五齊本紀下に、

狼狽奔走、惟將二門生自隨、藏朱雀航南酒榭中、夜方得羽儀而歸。

とみえるように酒店などもあり、岸边が繁華街であつたとが見て取れる。また『建康実録』巻九には、

詔除丹陽竹格等四航税。(注)按地輿志、六代自石頭

東至運署、總二十四所。

と二十四カ所の航の存在が示されている。当然南北の市街地にはそれ以上の街路があると考えられる。秦淮南北の往来が非常に活発であつたこと、そして都市生活が南北兩岸を跨いで盛んに営まれていたことが理解される。

建康には農地がなく、その産業が商業であつたことは、建康の消費都市としての性格を大きく規定する要因であつた。このような建康の都市としての様相は前節に述べた発展性の要因を補足するものである。しかし、発展の一方で強盗・掠奪など治安の悪化をまねくことにもなつた。『宋書』巻一〇〇沈約自序伝には、

時天下殷實、四方輻輳、京邑二縣、號爲難治、(中略)其閭里少年、博徒酒客、或財利爭鬭、妄相誣引。と京邑二縣における治政の難しさ、治安の悪さが示され、さらに同書卷七八蕭思話伝には、

時京邑多有劫掠、二句中十七發、引咎陳遜、不許。

と具体的な数字が挙げられている。

ところで、上述のように大城の外に市街地が展開する建康では、都市の内外に非常に多くの城壘を備えている。『元和郡縣志』『太平寰宇記』『六朝事迹編類』『景定建康志』『至正金陵新志』『嘉慶新修江寧府志』をみると石頭城以外にも、東府城・西州城・越城・丹陽郡城・冶城・瑯邪城・金城・建鄴縣城・秣陵縣城・檀城・白下城・湖孰城・白馬城・竹里城・新亭壘・仁威壘・葉園壘などが挙げられる。しかし、これらはあくまでも平面プラン上に配置された防衛施設である。

以上、建康の大城の外の様相を主にみてきた。境域は存在するが堅固な城壁(外郭)をもたないという開放性の中で、都市が独自に住み分けを生じ、商業を基幹産業として大消費都市に発展することになった。しかし一方で治安の悪化も生じた。このような様相の都市であるからこそ防衛においても課題を残している。では建康という都市は魏晉

南北朝という大きな戦乱の時代の中で、都市防衛の第一に挙げられる堅固な城壁をもたず、都市の発展性を優先しつつどのように都市を維持していったのか。上掲の城壘の存在をも交えながら、次に建康の防衛構想を考察していく。

(三) 都市の発展と防衛構想

『呉志』巻二によると、

（建安）十六年、權徙治秣陵。明年、城石頭、改秣陵爲建業。

と、建安一六年（二二一）孫権は京口から建業（秣陵）に移り、翌一七年（二二二）石頭城が築城される。実質的に建康の歴史はここから始まるといえる。建康と石頭城がその発足当初より不可分の関係をもっている以上、建康という都市を考える上に石頭城の存在は不可欠な要素である。

石頭城は清涼山の自然地形を利用したもので、西北部の鬼臉城と称される一・八mが六朝の旧址である。下層の岩盤は侵食に強い白亜紀の赭褐色硅質礫岩であり、大量の河光石を含む。岩盤上面には壘石の城牆と六朝城磚が残存している。東南部では磚石が確認されておらず、土壁（未焼の土壤）で築かれていたと推測されている。石頭城はその堅固さ故に明の南京城牆構築の際にもそのまま利用され

た。城内には倉と庫があつて糧食と武器が貯蔵され、また烽火台もあった⁽¹⁹⁾。

建康の防衛における石頭城の重要性は従来からも指摘されており、その堅固さは上記のごとくである。しかしながら、前節でも言及したように建康には石頭城以外にも多くの城壘が確認されており、建康という都市の防衛構想を考えるためには石頭城のみを取り上げるのは不十分である。

よって石頭城の機能性と防衛構想の実体像を把握するため、『三国志』『晋書』『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』

『南史』『建康実録』『資治通鑑』を以て前節に挙げた城壘すべてにわたって記事の収集を試みた。収集した記事を整理するとその多くは表一に挙げる各王朝の攻防戦に集約される⁽²⁰⁾。したがって、表一に取り上げる攻防戦の状況と諸々の城壘の活用状況をとらえることによって、建康の防衛構想のあり方が都市の生態とともに理解出来ると思う。以下便宜的に、表一から看取されるところを各王朝ごとに分けて考察する。

(一) 呉の防衛プラン

呉都建業では、大城のほか、石頭城、金城、白馬城、冶城、越城、丹陽郡城の存在が確認されている⁽²¹⁾。しかしながら、白馬城は烽火台であり、冶城、越城は春秋戦国期の遺

表一 建康をめぐる主な攻防戦

攻 防 戦	防 衛 側 の 主 な 布 陣	攻 防 戦 の 概 略	主 な 出 典
晋伐寇(280)	沈莹…板橋	王渾・周浚等呉軍を板橋に敗る。王渾石頭に至り、後主投降。	晋3・建4
王敦伐寇1	劉隗…金城 周札…石頭	王敦武昌で挙兵、石頭へ進撃。周札石頭開城、王敦石頭に拠る。	晋6・58
(322)	元帝…郊外	王敦、六軍と会戦、六軍敗戦。刁協・劉隗奔逃。	・98・建5
王敦伐寇2	温嶠…下敦…石頭	王敦募兵、王含・錢鳳等を派遣。朝廷王敦・祖約・蘇峻等を徵遣。	晋6・67
(324)	明帝…中堂	王含秦淮南岸に至る。温嶠朱雀桁を焼く。明帝南宮堂に出次。皇軍、王含を越城に敗る。王敦憤死。王含檣塔以西に五城造営。沈光陵口に築壘。劉邁・蘇峻帰還。王含・沈光北岸に進攻。	・98・100 建6
		劉邁・蘇峻、宣陽門・青溪に至る王含を敗る。王含等敗走。	
蘇峻伐寇	鍾雅・趙胤…慈湖	蘇峻横江・牛渚・廬山に進攻。	晋7・66
(327-329)	王愨期・鄭攀…直瀆	鍾山南・青溪で会戦、皇軍敗戦。宣陽門陥落、蘇峻入殿。蘇峻石頭に拠り、成帝を石頭に遷御。陶侃等豫章蔡洲に拠り、石頭西北で諸軍合流、白下(白石)に築壘。白石散で蘇峻戦死、蘇造石頭を保つ。匡術宛城を以て帰順。蘇頌臺城を焼く。蘇峻石頭を攻撃、蘇造等皆捕で敗戦奔逃。	・67・100 建7
王恭等伐寇	司馬道子…中堂 王珣…北郊	王恭・庾亮・殷仲堪、桓玄・楊佺期等。桓玄等石頭に至る。劉牢之背反、王恭新亭で敗戦奔逃。桓玄等尋陽に退却。	晋10・64
(398)	司馬元顯…石頭 謝琰…宣陽門		・84・建10
孫恩伐寇	高素・張崇之…石頭	孫恩丹徒・廣陵を襲撃。	晋10・100
(401)	劉襲…淮口 司馬恢之…南岸 桓謙・司馬允之・毛萼…白下 王琨・孔安國…中皇堂	京師戒嚴、百官入省。朝廷司馬尚之を徵遣。桓不才・劉裕蒜山に孫恩を擊退。劉敬宣・劉裕胤漢に孫恩を追破、孫恩敗走。	宋1 建10
桓玄伐寇1	劉牢之…溧洲	皇軍姑孰で大敗。劉牢之、桓玄に投降、新亭に皇軍を迎撃。新亭で皇軍潰散。元顯宣陽門へ上進、桓玄新亭に屯す。桓玄、道子を安城に遷し、元顯等を害す。	晋10・64
(402)			・99 建10
劉裕進攻	桓謙・何澹之…東陵 下範之…覆舟山西	劉裕丹徒で挙兵、京口を攻略。王元徳石頭で劉裕に呼応。劉裕竹里より進み、江衆・羅落橋で会戦、覆舟山麓で大勝。桓玄石頭より奔奔。劉裕石頭に鎮御後、東府に移り留書を置く。	晋10・99
(404)			宋1 建10
盧循伐寇	司馬德文…中皇堂 劉裕…石頭 司馬珍之…南掖門	南岸の居民を北岸に徙し石頭に立備。查諸・樂園・延尉に築壘。盧循蔡洲に泊し、兵を分け南岸に伏兵、白下に進攻。劉裕北向。查諸・張侯橋で会戦、盧軍丹陽部に屯す。劉裕南塘に派兵。盧循蔡洲より撤退。劉裕水軍を東府に治む。	晋10・100
(410)	劉敬宣…北郊 孟僕玉…丹陽郡 王仲德…越城 劉懷敬…建陽門		宋1 建10
瓜步役(450)	劉劭・劉紹・徐湛之…石頭	北魏太武帝瓜步侵攻。	宋61・95
劉駿進攻	褚湛之・劉綏…石頭 劉思孝…東府 劉渚…南門 蕭斌…朱雀桁 魯秀…白下	劉駿溧洲・江寧・新亭に進攻。柳元景新亭に築壘。劉駿新亭で即位。朱南之東府を攻略。臧質白下に上陸。薛安都・臧質南北より入殿。劉劭・劉渚伏兵。劉駿東府に幸す。	宋6・74
(453)	蕭道成…新亭 張永…白下 沈懷明・劉勰…石頭 袁粲・褚淵…殿省 茅恬…東府	桂陽王休範新亭に進攻。蕭道成新亭で迎撃、休範を斬首。休範別隊朱雀桁を攻撃、劉勰戦死。白下・石頭潰散。茅恬東府開城。休範別隊中堂に侵入、陳顯達等侵攻軍を擊退。張敬兒等宣陽門・莊嚴寺・小市を奪回、東府解放。	宋7・99
劉休範伐寇	蕭道成…朝廷 蕭繼之…東府 薛道世…司徒左府 黃回…新亭	沈攸之江陵で挙兵。袁粲石頭に龍城、劉暉等殿内で呼応伏兵。蘇烈等石頭に袁粲を斬殺。沈攸之郢城に侵攻。蕭道成新亭に出也。沈攸之郢城に敗戦潰散。張敬兒江陵を攻略、蕭道成東府に旋鎮。	齊1・26
(474)			建14・15
沈攸之伐寇	蕭道成…朝廷 蕭繼之…東府 薛道世…司徒左府 黃回…新亭	始安王遙光東府で挙兵。蕭道成六軍を率い東府を三面より包囲。垣厓生投降。皇軍、東府を攻略、遙光を斬首。	宋10・89
(477)			齊1・30
蕭遙光舉兵	陳孝嗣…宮城 蕭坦之…湘宮寺 曹虎…青溪大橋 左興盛…東府東掖門	蕭道成六軍を率い東府を三面より包囲。垣厓生投降。皇軍、東府を攻略、遙光を斬首。	建14・15
(499)			齊7・45
陳顯達伐寇	崔慧景…中堂 左興盛…新亭 徐世標…杜姥宅 王瑱…北掖門	陳顯達尋陽で挙兵、采石に皇軍を擊破、石頭に至る。宮城敗警、六軍固守。西州で会戦。陳顯達敗死。	齊7・26
(499)			建15
崔慧景伐寇	蕭道成…新亭 謝續…白下 蕭大臨…新亭 (王僧辨進攻時) 盧暉略…石頭 阮亮…昇國城 侯景…石頭城東北 王偉…臺城 宋長貴…延祚寺	崔慧景廣陵で挙兵、蕭寶玄京城で内応。竹里・北掖門で会戦。皇軍敗戦、崔慧景宮城を包囲。東府・石頭・白下・新亭潰散。蕭懿入援、越城に屯す。南岸で会戦、崔慧景敗死。蕭寶玄伏誅。	齊7・51
(500)			建15・16
蕭衍進攻	張瑄…石頭 李居士…新亭 王珍國…朱雀桁 徐元瑜…東府	蕭衍晉・蕭衍・蕭預等挙兵。新亭で会戦、李居士敗戦。蕭衍越城・阜夾橋・龍門・道士壇に布陣。東昏侯南岸昌邑を焼き戰場を開く。朱雀桁南で会戦、王珍國敗戦。東府・東宮・新亭投降。石頭・白下潰散。蕭衍石頭に鎮す。宮署・官府入城、宮城閉門。王珍國入殿、東昏を斬首。	齊7
(500-501)			梁1・9
			・11・17
			建15・17
侯景伐寇	蕭正德…丹陽郡 蕭推…東府 蕭大春…石頭 謝續…白下 蕭大臨…新亭 (王僧辨進攻時) 盧暉略…石頭 阮亮…昇國城 侯景…石頭城東北 王偉…臺城 宋長貴…延祚寺	侯景歷陽を陥し、采石より建康に至る。蕭正德、侯景に内応。石頭・白下潰散。東府陥落。湖頭・青塘・青溪東・東府北で会戦、皇軍敗戦。侯景臺城を攻略、建康占拠。武帝崩御。侯景軍巴陵で大敗。王僧辨侯景を追撃、弘公洲に拠る。侯景淮陰に立備。皇軍石頭西北に立備。侯景石頭東北に立備。王僧辨等石頭城北で侯景を擊退。石頭・昇國投降。侯景奔逃伏誅。	梁3・4
(548-552)			・5・44
			・45・56
			陳1
			建17
王僧辨舉兵	陳叔英…朝廷 蕭摩訶…樂遊苑 梁綏…書閣寺 魯慶達…白土崗 孔範…寶田寺 任忠…朱雀門 蕭懿…白下	王僧辨石頭で挙兵。陳霸先・周文育南北より石頭を攻撃、王僧辨伏誅。任約・徐嗣徽石頭に拠り挙兵、采石に北齊軍を迎える。陳霸先石頭を攻略。任約、徐嗣徽敗走、北齊軍投降。北齊軍本隊陵陰放城、方山・倪塘に進攻、遊騎で臺城に至る。北齊軍鍾山・幕府山・北郊壇に進攻。皇軍江寧で糧運を断つ。周軍北郊壇で会戦、侯景都白下より潰散、北齊軍潰滅。賀若弼台城・京口・曲阿・南徐を攻略、鍾山に進攻。韓擒虎横江・采石・姑孰・新林・南豫州を攻略、石頭に進攻。陳軍兵を分け要害に鎮守。陳軍白土崗に兵を結集し会戦、潰敗。任忠陽關に投降、朱雀門・南掖門より隋軍を入れる。	梁45・陳1
(555)			・8・建17
任約等舉兵	(北齊軍本隊侵寇時) 周文育…方山 徐茂…馬牧 杜陵…朱雀桁 (後)周文育・侯安都…白土崗 梁敬帝・長樂寺		梁6
(556)			陳1・8
			北齊4
			建17
隋軍の伐寇	陳叔英…朝廷 蕭摩訶…樂遊苑 梁綏…書閣寺 魯慶達…白土崗 孔範…寶田寺 任忠…朱雀門 蕭懿…白下		陳6・31
(588-589)			隋2・52
			建20

<注> 晋=晉書, 宋=宋書, 齊=南齊書, 梁=梁書, 陳=陳書, 北齊=北齊書, 隋=隋書, 建=建康實錄。

南史・資治通鑑は内容の重複のため出典から除く。

布陣については駐屯者名が明記される事例のみ掲載した。

構をそのまま使い、丹陽郡城も実質的には晋の太康中に築城されること²³⁾から、呉の建業で実際に防衛施設といえるのは、石頭城と金城だけということになる。金城は呉の後主孫皓（位二六四―二八〇）が建てたもので、現在の宝塔橋付近の金陵村にあたるといわれる²⁴⁾。建業城の北面の防衛拠点である。

ところで、建業の諸城についての実体を知る史料は極めて少ない。晋の呉征討時における状況が唯一の資料を提供するものであるが、実質的に活用されたのは石頭城のみである。その際、上流の板橋を陥れると晋軍は一気に石頭城を攻略する。石頭城の攻略と同時に孫皓は降伏し呉は滅亡する。この時石頭城は一方で晋の建業攻略の拠点として機能している。石頭城の戦略上の重要さのみが際立っており、上述の個々の諸城を利用した総合防衛構想は未完成であったといえる。

（2）東晋の防衛プラン

東晋期の攻防は全くの内憂である。東晋の攻防戦で注目されることは、石頭城の重要性は言うに及ばず、石頭城以外にも数々の防衛施設、防衛の拠点が登場し、それが段階的に戦乱を経験する中で整備されてくることである。

王敦の乱の時は、呉の時期と同様に石頭城の要塞的機能

の卓越性が見られるにすぎないが、次の蘇峻の乱の時には宮城も焼失するほどの市街戦となり、乱後の宮城の新築・移転とともに都市プランも新たに整備されることになる²⁵⁾。

この攻防戦での白石壘の登場をはじめ、王恭・桓玄等の侵寇の時には中堂（中皇堂）を中心に石頭城―北郊（北籬門の位置。北郊は後に幕府山の南に移されることから、混同を避けるため以後文中では北籬門と記す）―宣陽門―新亭を結ぶラインが確立されている。このラインは以後の建康防衛の一つの目安になる。つづく孫思・盧循の乱においては、中堂を中心にした石頭城―北籬門―秦淮岸（朱雀桁が基点）というラインを基準に、これを北側に白石壘、南側に新亭（東晋期、壘は未築）と延ばしたラインが完全に防衛ラインとして機能している。盧循の乱では越城の修復がなされる。前線の新亭に対し、孫思、盧循の乱では秦淮河の重要性が増し、秦淮岸、特に朱雀桁を基点とした南岸の越城・丹陽郡城という拠点が成立する。

東晋の中期には、度重なる内乱に備えて石頭城が修復される²⁶⁾とともに、呉の時にもまして石頭城の防衛拠点としての重要性が明確になったことも事実である。しかしその一方で、石頭城に拠る単独の防衛から一歩進み、都市の郊に拠点を設け、石頭城、宮城と連携させる防衛システムの確

立が蘇峻の乱以降にみられることも、都市プランとの関係において非常に重要な点として注目すべきことである。ただし、江或は南面からの攻撃に対して白石壘―石頭城―新亭もしくは北籬門―石頭城―秦淮岸のラインは強固であるが、東側の拠点が未整備で、西側の石頭城に比する機能をもつ防衛施設が存在してはいない。この点で東晋末に劉裕（宋武帝、位四二〇―四二三）が自らの拠点である東府を城として修復したことは、東側の拠点の成立を考える上で非常に注目すべきことである。なお後述するが、蘇峻の進攻経路（牛渚↓鍾山↓青溪↓大城↓石頭城）は、前節で言及した東晋の初に成立している東側の境域ラインに沿ったものであり、都市の境域の性格を考える上で重要である。

（3）劉宋・蕭齊・蕭梁の防衛プラン

瓜歩の役では、太子劭が石頭城に鎮するなど、宋代を通じて石頭城の重要さは前代とあまり変わらないが、劉宋の中期、劉劭と劉駿（孝武帝、位四五三―四六四）の対峙の際にこれまで拠点としてのみ認識されていた新亭に壘が築かれることになる。またその際、東府城の攻略が重要となっており、東府城の戦略的重要性もこの時はじめて登場してくる。すなわちこの時点で、石頭城―新亭壘―大城―東府城―白下壘という外のラインと、その内側の石

頭城―秦淮岸―大城―東府城―北籬門という内のラインが、石頭城―大城―東府城を軸に成立してくるといえる。なお、前廢帝（位四六四―四六五）は石頭城を長樂宮に、東府城を未央宮に、北郊を建章宮に、南第を長楊宮に比しているが、平時には防衛の拠点が都市の基点として意識されていたことを示している。そして右の防衛構想がまさに活用されたのが桂陽王休範の乱の時であった。『南齊書』卷一高帝紀に、

宜頓新亭・白下、堅守宮掖・東府・石頭以待。

とみえるのは、まさに右の防衛構想の確立を示している。⁽³⁰⁾

しかしこの時、前線の新亭は死守していたものの、その後方の秦淮岸での混乱が石頭・白下そして東府の投降を連鎖的に生むこととなった。上述の防衛ラインは、それが連鎖的に機能するラインであるが故に、一カ所が崩壊すると連鎖的に崩れてしまうという弱点、危険性をも露呈したのである。また、阮佃夫のクーデター計画（元徽五年、四七七、未遂）の中で石頭城・東府城を固めることが示されている。石頭城と東府城がクーデターという宮廷内抗争の場合にも大城の両翼として重要な意味をもつ存在であったことが分かる。

蕭齊・蕭梁においても劉宋中期に確立された防衛プラン

がそのまま活用されている。東昏侯（位四九八〜五〇一）と蕭衍（位五〇二〜五四九）の対峙の際にはまさに南側のラインをめぐって攻防が展開され、特に東昏侯は秦淮南岸の[邑]屋を焼き、ここに戦場を開くなど、二つのゾーンを意識した戦略を立てている点が注目される。また侯景侵寇の時も、上述のラインに沿った布陣を敷いている。この時は秦淮南岸の丹陽郡城に屯した臨賀王正徳が侯景に内応したことからゾーンが一気に崩れ、石頭城・白下壘は放棄された。それ故に攻撃は東府城と大城・宮城に集中している。

以上、劉宋中期に確立され、建康が最も都市として発展、充実した蕭梁まで同一のゾーンラインが活用された点は重要である。このゾーンラインは、幾多の戦乱を経験することでその拠点が成立してきたことから、都市の防衛においてかなり信頼性のある防衛構想であったといえる。しかしそれが十分に機能していないのは、南朝における攻防戦が内憂によるものであり、さらに内応等の行為も発生していることから、その機能上の問題というよりは、運営面に問題があったというべきである。

（４）蕭梁終末期・陳の防衛プラン

蕭梁の終末期、侯景の乱によって建康の都市機能は大きな打撃を被る。その混乱の中で注目されるのが、任約と徐

嗣徽の反乱である。徐嗣徽は北齊軍を引き入れるが、石頭城に入った部隊は井戸を塞がれ降伏する。問題は北齊軍の本隊がとった進攻経路である。蕪湖↓秣陵故城↓方山↓倪塘↓鍾山龍尾↓幕府山↓玄武湖の西北・幕府山の南（北郊壇）という経路は今までの侵寇にはみられない動きである。途中より蘇峻の進攻経路と重なる部分はあるが、それより手前は新亭・秦淮南岸を経ずに、東側のラインに直接侵入している。その理由として次ぎの二点が想定される。一つは新亭・秦淮南岸という南側の強固な防衛ラインを避けたことによるもの、その二は、先の侯景の乱によって建康の防衛ラインが弛緩或は崩壊したことによるものである。

隋軍の進攻の経路もまた従来のものとは異なる。東側からの進攻経路は京口↓南徐州・曲阿↓鍾山↓白土岡の東南↓宮城というもので、京口を陥れた後は一気に建康に進攻している。一方、南側からの進攻は韓擒虎を主師として姑孰↓新林↓南豫州（牛渚）↓石子岡↓朱雀桁で従来のものである。東側からの進攻と南側からの進攻で注目される点は、梁代までにみられた石頭城・新亭壘・東府城・白下壘への一斉布陣の記事が現れないことである。特に石頭城・東府城に触れる記載がない。また南側の進攻経路では、新亭壘は素通りである。これらの点から、（３）に述べた防

衛構想が全く機能していないことが想定される。事実、東府城は侯景の乱によってかなり大きな被害を受けている。梁終末期の北斉軍の進攻経路の中でも白石壘が単独で機能し、他の三施設には布陣の記事もない。以上のような状況から、上掲二点の想定理由のうち、侯景の乱による防衛ラインの弛緩或は崩壊を考える後者を採用するのが妥当といえる。すなわち、侯景の乱の後、蕭梁の終末期の段階で、ゾーンによる防衛構想は崩壊していたと考えることが出来るのである。ただし石頭城のみは、隋でも蔣州の州廠が置かれ、単独の施設として活用されていることから、隋侵寇の時点でも要塞としての機能を有していたと思われる。

以上、建康の攻防戦を時間軸の中で追ってみた。時の経過の中で、建康には石頭城を防衛の中心として、攻防戦の経験を重ねるごとに白下壘・東府城・新亭壘という重要な施設が整備されていった。すなわち、大城を中心にした石頭城（西）―新亭壘（南）―東府城（東）―白下壘（北）という四角形のゾーンが、時代の推移とともに確立された。また同時に、石頭城と東府城を両翼に南北を縮めた石頭城（西）―秦淮岸（南）―東府城（東）―北籬門（北）の四角形のゾーンも成立させており、この二つのゾーンラ

建康石頭城と洛陽金墪城（塩沢）

インによって都市が防衛される形を形成したのである。特に石頭城を三角の一頂点とした白下壘―石頭城―新亭壘という江に面するライン、新亭壘を三角の一頂点とした石頭城―新亭壘―東府城という南側からの攻撃に備えるラインは強固なゾーンラインであった。このゾーンは東晋においてほぼその形を形成し、劉宋中期に防衛施設としての東府城・新亭壘が整備されることによって確立された。そして、このゾーンが完全に整った形で活用されたのが桂陽王休範の乱の時である。しかし、その際一つの弱点をも露呈した。すなわち、ゾーンが連鎖性をもっていることから、一カ所の崩壊によりゾーン全体が連鎖的に崩れることである。これはその機能性よりも防衛システムの運営面における問題であって、特に内乱の多い南朝の政治体制の中では致命的なものであった。しかしながら、梁末の侯景の乱までこのゾーンは活用されていることから、建康の防衛構想に最も適した形であったことは事実である。そしてこのゾーンラインは、梁末の侯景の乱によって都市が大きな被害を受けた時、同時にその機能が弛緩或は停止したと考えられる。

なお、東側のラインが比較的手薄になっているのは、私的な部曲を養う貴族の邸宅が東側に集中していたこと、そ

してそのさらに東方には京口という重要な軍事拠点⁽³²⁾が位置していることにあると思われる。ところで、中堂、南堂、宣陽門等の城門の存在以外、特に注目すべき施設が大城内では特定出来ない。すなわち、ゾーンの核となる大城内の防衛には確固たる防衛構想が見出せないのである。この点がゾーンの成立と関係があるのか、或は別に問題があるのかという点については今後の課題としたい。

では、本節にみたゾーンラインと建康の都市としての境域とはどのような関係にあるのであろうか。次にこの点について考えていくことにする。

(四) 都市の範囲(境域)と防衛ゾーンの位置関係について

先に第二節において、都市の境域と籬門の存在について触れた。籬門は都市空間の内外を区切る境域ラインを形成するが、籬門間を結ぶその空間上のライン(竹籬が設けられていたと想定出来る)は一種の指標であって堅固な城壁ではない。しかし籬門によって市内(京邑、京師)と市外(野)の空間は明確に仕切られているのであって、その籬門を結ぶラインの存在は単にそれが空間上のラインであるというのではなく、空間の分断線として存在しているの

ある。その内と外では空間の認識が大いに異なることから、その境界線を越えるか否かの行為は明確な意志のもとになされることになる。すなわち、内なる危険性と外なる安全性の意識は当然戦略的な行動にも表れることになろう。東晋期に蘇峻が進攻した経路、梁終末期に北齐軍本隊が採った進攻経路が東側の鍾山西麓を迂回しているが、そのラインは東側の境域ラインに沿った行動である。特に東側の境域ラインの内側には時代を経るごとに貴族の邸宅が営まれた。そして貴族の私的に抱える部曲集団が各貴族のもとには相当数いた。したがって、東側のラインに踏み入ることは、各貴族の邸宅における一種のゲリラ戦を想定しなくてはならない。それ故、東側の郊のライン、境域ラインは空間の存在が非常に重かったと考えられる。蘇峻や北齐軍が東側より都市の境域内に入らず、わざわざ北に迂回し、東北において攻防戦を繰り広げたのはまさにこのためと考えられる。

次に境域ラインと、前節で明らかとなったゾーンによる防衛ラインとの交錯関係をみる。東府城にいたる東側が境域ラインの内側にかなり入り込むが、石頭城—秦淮岸—東府城—北籬門のゾーンは境域内にきれいに入り込み、石頭城—新亭壘—東府城—白下壘のゾーンは南北に延びること

から南と北で境域ラインと交錯し、境域の外に出る。この重なり合う二つのゾーンの存在が軍事空間を形成し、それが境域ラインと交錯することで都市の境域の空間をも軍事空間に変える。すなわち、軍事空間と境域空間の交錯が外郭としての役割を果たすことになったといえる。しかし、境域ラインと防衛ゾーンの存在は、非常時には緊張した外郭の機能を発揮する空間となるが、平時には単なる境域の空間である。それ故に、第一節で論じた都市の発展性という点では非常に大きな効果をもっていた。籬門によって構成される境域空間、戦乱の被害を被りつつも回復を繰り返す市街地、戦乱の経験の上に構築されたゾーンによる防衛構想とが相互に絡み合ったところで、建康という都市は発展していったと考えられる。

小結

呉・東晋の建康はその創建当初において一將軍府であった。それは周二〇里の城壁の中で十分に完結可能なものである。しかし後に王朝へと発展し、建康はその首都として認識され、人口の集中・都市化が促進される。そこに都市の発展性ということが問題となる。また南朝では度重なる内乱に遭遇することから、都市の回復性ということも問題

建康石頭城と洛陽金墪城（垣沢）

となる。発展性・回復性が要求される都市のあり方からいえば、堅固な城壁によって閉鎖的な空間を作り出すことは好ましいとはいえず、都市の拡大という面からも、拠点施設を設けて都市化する区域をゾーンで防衛するという方式の採用は、非常に卓越したものであった。そのゾーンの中心として機能したのが石頭城であった。その他の拠点施設の増設と配置は、攻防戦の際の経験を通してなされたものである。ゾーンによる軍事的な空間は、籬門によって構成される都市の境域空間と交錯することで都市空間の存在をより強く認識させた。自然環境と合わせゾーンによる防衛構想が正常に機能した場合には、城壁と同様の効果を発揮することが期待された。しかし実際のところ、ゾーンによる防衛構想は十分に機能したとはいえない。なぜならば、南朝の攻防戦が内乱という言葉に示されるように、ゾーンの構造を熟知した内部の対立であったからである。なお、ゾーンと境域ラインによって構成される空間は、平時においては単なる都市の境域を示す空間であった。それは都市の発展、特に貴族制という社会構造からくる消費性の高い都市が発展するうえで非常に大きな効果をもたらした。

一方、ゾーンによる防衛は一カ所が崩壊すると連鎖的に崩れるという機能面での大きな欠陥があった。また、ゾー

ンの形成には長期にわたる都市運営上の経験が不可欠であった。この二つの条件は、ゾーンによる防衛構想が建康以外の都市で採用されなかった要因の一つであると考えられる。

二、洛陽の変遷と金墉城

魏晉・北魏の洛陽は後漢の洛陽（雒陽）の旧基を継承して営まれる。その平面プランは、ボーリング調査³⁴⁾によってすでに基本的な部分が明らかにされており（図二）、また多くの研究成果もある³⁴⁾。しかし、時間的な流れの中で営まれる都市の移り変わり、都市における居住空間のあり方、それを保護する防衛空間の存在については、未だ十分な議論がなされているわけではない。本章では、洛陽の都市空間とそこに存在する防衛施設のあり方をとらえ、度重なる戦乱を経験する都市の変遷と都市機能の復元性、そしてそこに展開される防衛空間の推移を考え、以て同時代的に営まれた建康との比較を論じていきたいと思う。

（一） 洛陽の都市空間と防衛施設

洛陽の金城は東西六里南北九里の規模をもち、周囲は版築による堅固な城壁で囲まれている³⁵⁾。周囲二十里とされる

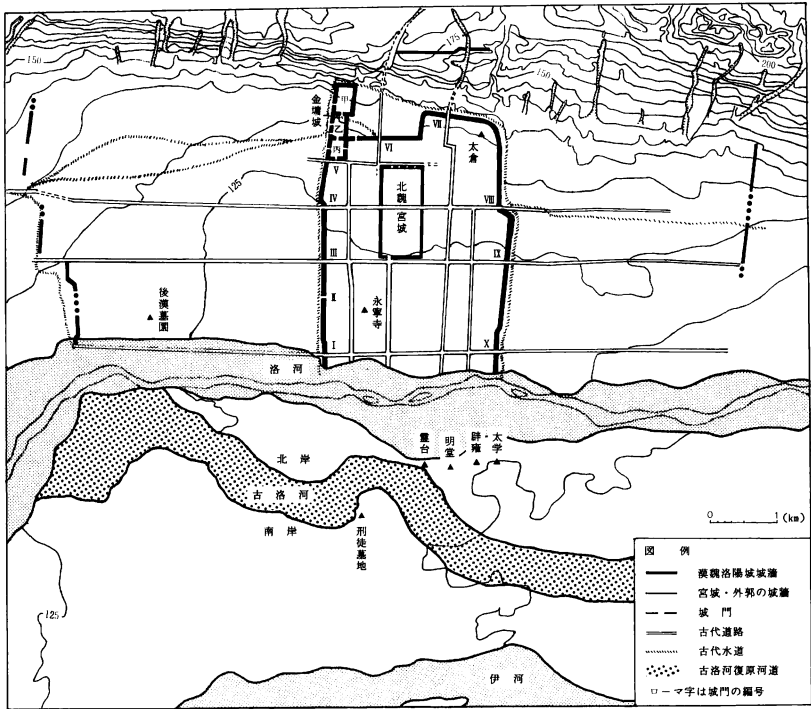
建康に比べてみると、周長で約一・五倍、面積にして二倍以上の規模をもつ。建康では早くから官署の一部や居住区・商業区が金城の外に形成されており、発展の要因と形態についてはすでに前章にて言及した。では建康に倍する面積を有する洛陽では、都市空間はどのように形成されていたのか。本節では、魏晉南北朝期における洛陽の都市空間の様相について、居住区と防衛施設の配置を踏まえて考えてみたいと思う。

（一） 居住空間

後漢の洛陽では、金城の外に馬市・南市の商業区のほか、上商里や平門外の浮橋近郊の居住区が確認されており、すでに金城の外に都市空間が営まれていたことが分かる³⁶⁾。当時の都市境域については後述するが、洛陽は後漢末の董卓による掠奪と破壊を被り、さらに百万ともいわれる人口が長安に徙されたことから³⁷⁾、都市機能は停止状態にあった。よって洛陽は、曹丕（魏文帝、位二二〇～二二六）によって首都と定められるまでの三十年間（初平元年～一九〇）～黄初元年（二二〇）、戦略上の拠点として認識されるのみであった。したがって、曹魏によってどの程度旧状が回復されたかは明確にしがたいが、依然として国内は三国分立の戦時下にあることから、周三十里に達する

図二 漢魏洛陽城の調査状況

建康石頭城と洛陽金墪城（塩沢）



（「北魏洛陽外郭城と水道の調査」『考古』1993年7期より作成）

大城内を満たす都市機能が即時に完備されたとは考えにくい。また、前代に比する都市が営まれるに十分な人口も存在しなかったと考えられる。このことは『魏志』卷一三鍾繇伝に、
自天子西遷、洛陽人民單盡、繇徙關中民、又招納亡叛以充之、數年間民戸稍實。
と、関中の民を徙し、さらに逃亡者や反乱者を招き入れて洛陽の民戸を補充している点からも明らかになる。なお、殿署の造営は明帝によって積極的に展開され、宮殿・宮苑の多くがこの時期に整うことになるが、明帝期の造営は宮府を中心としたもので、都市全体がどれほど整備されたかは判然としない。大城の東側に馬市が営まれていたことから大城の外に居住民の活動の場を想定することも出来るが、この事例に止どまる。魏の洛陽はこのように後漢の規模に復したとは必ずしも言い切れないところがある。
ところが、三国を統一した晋朝になると、大城外の東面には常満倉・白社・牛馬市、南面には南市、大城内の西面には大市（金市）などが確認され、居住区や商業区が大城の内外に展開し

ていたことが分かる。また『太平實字記』卷三河南道三河南府一洛陽縣条に、

晉魏之代凡有一萬一千二百一十九門、自永嘉之亂劉曜入洛陽、元帝渡江官署里閭、鞠爲茂草。

と示されるように、魏から晋へは戦禍を経験することなく移行し、洛陽は再度統一王朝の首都として規模の充実と繁栄を遂げることになる。貴族制社会を反映して洛陽では貴族・豪商による奢侈生活が営まれ、消費型の都市の様相を呈していた。

以上にみるごとく、洛陽では建康のように積極的ではないが、早くは後漢より戦禍を経た後の魏朝および晋朝においても、大城外に一部の居住区・商業区は成立していた。ところが、晋朝で再び回復された洛陽の繁栄は、上掲『太平實字記』に「鞠爲茂草」と記されるごとく永嘉の戦禍により荒廃し、引き続いて五胡十六国時代の戦禍を再三被ることになる。その後、北魏孝文帝(位四七一―四九九)の遷都により、洛陽は大城の外側に三二〇坊(里)もの居住区・商業区とそれを取り囲む外郭を配する大都市に再び生まれ変わる。宮城・大城および四面に展開する坊の様相については、『洛陽伽藍記』および『水経注』卷一六穀水条をもって十分に理解することが出来、また研究成果も数多

く発表されている。⁽¹⁾ 北魏洛陽の具体的な様相については紙幅の都合上省略するが、ここで考えておきたい点は、先に保留しておいた都市の境域についてである。北魏の洛陽では大城のさらに外側に外郭が形成され、これが都市の境域となっている。では、後漢ならびに魏晋期の境域はどこに求められ、それは北魏の外郭と何如なる関係にあるのか。次にこの点について述べる。

(Ⅱ) 都市の境域

後漢・魏晋の洛陽に関しては、建康のごとく明確な境域を示す記述は確認出来ない。しかしながら、都市の境域を示す一つの要素として、その場が人々の送迎の場となっていることが考えられる。本項ではこの点を考察の拠り所として、境域のラインを探り出してみたい。

送迎の場という点から考えてみると、まず大城の西方では長分橋(張方橋)の存在が注目される。ここには張溝があり、千金堀や夕陽亭が置かれている。⁽¹²⁾ 夕陽亭は後漢代の太尉楊震の送別にちなんだ名称であり、洛陽都亭とも郭下之亭ともいわれる。⁽¹³⁾ 晋の賈充が長安に鎮する際にもここが百僚送別の地となり、八王の乱の際、河間王の派遣した張方もここに軍宮(張方壘)を営んでいる。⁽¹⁴⁾ また北魏の崔延伯出帥の地でもある。⁽¹⁵⁾ 亭については防衛上の性格が指摘さ

れており、楊寬氏は前漢長安の事例も踏まえて軍事的防衛強化の拠点であると認識している⁽⁴⁷⁾。

一方、東方では大陽郭の存在が注目される。大陽郭は東の郭の呼称であり、そこには七里橋も設けられており、やはり送迎の地点であるとともに軍事上の拠点でもあった⁽⁴⁸⁾。

西の長分橋と東の七里橋とは大城を挟んでほぼ対称の“郭”の位置にある。

また、南方では洛水の存在が注目される。『後漢書』卷七八張讓伝には、

鑄天祿蝦蟇、吐水於平門外橋東、轉水入宮、又作翻車渴鳥、施於橋西、用灑南北郊路、以省百姓灑道之費。

とあり、“用灑南北郊路、以省百姓灑道之費”から楊寬氏は平門外の浮橋、南北郊路の両側が人口の集中地点であり、後漢の南郭であると指摘している⁽⁴⁹⁾。大城外の居住区の存在を示すものであるとともに、その南側では刑徒墓も発見されていることから、洛水の北岸が明らかに都市の南側の境域地帯であることが分かる。

以上の点から、後漢代の都市の境域は東の大陽郭（東の郭のライン）、西の長分橋（西の郭のライン）、南の浮橋（南の郭のライン）に求めることが出来る。なお、夕陽亭に代表される後漢代の大城外の門亭としては、北面の萬壽

建康石頭城と洛陽金墪城（陥没）

・臨平亭、西面の夕陽・凡陽亭⁵⁰、南面の津門・宣陽亭等十二の門亭があり、大城の各城門に付属する施設であった。上述の境域（以下郭のラインという）で北のラインが明確ではないが、西面と南面の門亭が郭の内側にあることから、萬壽・臨平亭を結んだラインの外側もしくは線上に求めることは可能である。

魏晉の洛陽については、後漢の郭のラインから外に発展した形跡はなく、張方も長分橋に拠点を置いている点を勘案すると、後漢の郭のラインを受け継ぎ、その内で都市が営まれたと考えられる。東晉が建康に建てられた後、早い時期に郊のラインを確定しているのは、洛陽の郭のラインの存在を反映したものといえる⁽⁵²⁾。すなわち、洛陽の境域は郭によって示されており、それは境域ラインという意味において建康の郊と同一のものであった。しかしながら、洛陽ではやはり広大な大城が都市機能の中心であり、また大城と郭との間の空間に関する記事が非常に乏しいことから、その空間が建康のごとく居住区・商業区として積極的に活用されていたとは考えられない。

ところで、後漢・魏晉の郭のラインは、北魏洛陽の洛水以南に張り出した区域を除くと、東西の郭門が設けられているラインとほぼ一致する。このことは、北魏の洛陽が大

城ばかりでなく外郭においても旧来の都市を基礎として形成されたことを示している。

以上、洛陽には宮城・大城・郭が存在した。郭は堅固な城壁を施したのではなく都市の境域を示す空間上のラインであった。この洛陽の郭の構想が建康では郊となった。洛陽にも建康ほどではないが、大城と境域ラインの間に居住区・商業区が存在していた。この区域が北魏洛陽では坊条という形をとって整然と整えられることになる。

(Ⅲ) 防衛施設の配置

大城東陽門内の北側には將軍府があり、晋の初頭ではここに左右前後の四軍が揃っていた。またそこには五衛校尉府も置かれており、防衛に関する官署は大城の東側に集中していた。⁵³⁾一方、大城の北西には魏の明帝によって築かれた金墪城があり、大城の北壁にとってはまさに巨大な牆堞(馬面)の様相を呈している(図二)⁵⁴⁾。また、金市の北側には洛陽壘と洛陽小城とがあり、金墪城と洛陽壘、および洛陽小城とは連結して一つの施設(金墪城)とみなされるようになっていった(本稿では暫定的に図二の甲・乙・丙を一組にして金墪城という)⁵⁵⁾。西・北の防備もまた十分であった。大城内の南側には官衛公署が集中しており、特に西南には陵雲台(五胡期では陵雲台城)⁵⁶⁾と冰室がある。⁵⁷⁾郭

三台の銅雀・冰井二台に比するものといえる。さらにボーリング調査によって護城河(外濠)⁵⁸⁾が城壁を還流していることが明らかにされている。

以上のような配置をみると、まさに大城内のみを防衛する空間を形成しており、大城外に展開する居住区への配慮は全く想定されていない。大城の四面には後漢代に城門の外亭が存在していたが、魏晋ではその存在は確認されず、その場所のみが戦略上の拠点として認識されていた。

北魏に至って旧来の都市境域をもとに外郭が設定され、その内側に居住区や商業区が坊条に基づいて配置される。その際、金墪城は完全に外郭内に取り込まれ、さらに大城に連結してまさに一体化することになる。外郭内に取り込まれる防衛施設は他には確認されず、また一方で外郭の外側にも防衛施設が形成された形跡は確認出来ない。境域ラインに設けられた郭門が重要拠点として認識されるに止どまる。さらに外側には、黄河に面した孟津や河南・滑台・虎牢の諸城を挙げることが出来るが、都市近郊という枠組に入れるには距離的に不適切である。したがって、大城の外を考えてみると、大城に連結する金墪城しか確認されないものである。

以上、魏晋の洛陽では大城中心の防衛構想がとられ、そ

れはまた北魏洛陽でも同様であった。確かに居住区・商業区は大城の外に成立していたが、それを都市の一部としてとらえ保護するという都市全体の防衛構想はまったくみられないのである。では、実際に戦乱を経験する洛陽は、都市としてどのような変貌を遂げることになるのか、次節で考察してゆく。

(二) 戦乱と都市機能

洛陽は、晋の八王の乱以降北魏孝文帝の遷都まで間（二九一～四九三）、絶えず戦乱の中にあつて常に攻防の地となつた。それは後漢以来三〇〇年にわたる王朝の首都としての重要性に起因するところである。では、戦乱の中で、洛陽の防衛構想は如何に機能し、防衛施設は如何に活用されたか。また都市は如何に機能していたか。本節では、終始戦時下におかれた洛陽の状況に鑑み、洛陽の攻防戦、金墉城等の防衛施設、防衛の拠点に関する史料を時間軸の上で整理することと右の問題を考えていくことにする。なお、史料としては『晋書』『魏書』『北齊書』『周書』『隋書』『北史』『資治通鑑』『十六国春秋輯補』を使用した。が、紙幅の都合上史料の提示は注記の出典のみに止どめる。

(1) 八王の乱

八王の乱の経緯については煩雑なので省略するが、この乱では趙王倫の府第などの市中の拠点が指摘出来るに留まり、特定の軍事施設が攻防の場になったというわけではない。八王の乱は物事の判断力を欠く恵帝（位二九〇～三〇六）をめぐる皇族間の権力闘争であり、恵帝をはじめ皇太后・皇太子等が金墉城に幽閉された。攻防戦は専ら禁軍の働きが中心となり、大城内で戦闘が展開されたことが特徴である。大城内での攻防戦をよそに皇帝・皇族が幽閉された金墉城は、その防衛能力の突出性もあつてか、逆に彼らを保護する施設としても十分に機能した。一方、諸王の率いる十万規模の兵力が洛陽周辺に展開したわけであるから、大城内の荒廃は当然のこととして、大城外の居住区も相当に荒廃したと考えられる。

(2) 永嘉の乱

匈奴の劉漢との攻防戦は、永嘉三年（三〇九）と五年（三一〇）の二回に渡る³⁹。初回の攻撃は西南からのものであったが、大城の城壁際で撃退する。五年六月の再攻撃は大城の四面から展開される。大城内の混乱に伴い懷帝（位三〇六～三一三）は大城北の華林園より逃亡を企てて囚われ、洛陽は陥落する。初回の攻防戦によって大城の堅固さ

は証明されたといえるが、具体的に城門以外の防衛施設がどのように機能したかは明確にしがたい。

(3) 劉曜と石勒の対立

永嘉の乱後も洛陽の軍事的な重要性は存続し、前趙劉曜（位三一八～三三八）と後趙石勒（位三一九～三三三）が洛陽をはさんで直接対峙する（咸和三年、三三八）⁽⁶⁰⁾。その攻防戦の拠点は金墪城であり、劉曜は石生を金墪城に囲んで城西に一〇万の兵を展開した。石勒は宣陽門より大城を抜け西北の上西門（閭闔門）を攻め、北西より石虎（位三三四～三四九）が進攻し劉曜を破る。まさに金墪城の防戍としての機能が活用された事例である。また、石勒が大城内を縦断し城内は攻防戦の場となっているわけで、このような状況下において洛陽の都市としての機能が維持されていたとは考えにくい。以後洛陽には石氏一族が留まるが、それは軍事拠点に駐留しているわけで都市に駐留しているわけではない。その点は次の桓温でも同様である。

(4) 桓温の進攻

冉魏の洛陽守将周成の混乱を機に桓温は北伐し、洛陽を奪回する（永和十二年、三五六）⁽⁶¹⁾。しかし大城内には留まらず、金墪城を修復してここに留まる。城内の復興を考えてのことか、或は防衛上金墪城が適していたかは判然とし

ないが、いずれにしても洛陽という都市の荒廃が極めて進んでいたことを示している。また金墪城の存在が重視され、洛陽の政治的な機能が金墪城で営まれていたことも注目される。

(5) 東晋・前燕・前秦・後秦の攻防

桓温の撤退以後、金墪城に鎮する沈勁を前燕が陥れ（興寧三年、三六五）⁽⁶²⁾、前燕の金墪城に鎮する慕容筑を前秦が陥れ、前秦の鄧羌が金墪城に鎮する（太和四年、三八九）⁽⁶³⁾。また前秦の崩壊により、東晋の朱序が洛陽に鎮する（太元一五年、三九〇）⁽⁶⁵⁾。その後隆安元年（三九七）には後秦の姚興が金墪城を攻撃し、その際河南太守夏侯宗之が金墪城を固守する。しかしその二年後（隆安三年、三九九）には洛陽は後秦領となる⁽⁶⁶⁾。

この後北伐を挙行した劉裕が金墪城を攻撃し、洛陽を再び奪回する（義熙十二年、四一六）⁽⁶⁷⁾。以後洛陽の守備は金墪城に置かれる。その際の主な守備配置は、金墪城（王康）、大城南（助平）、大城西（司馬道恭）、陵雲台（司馬順明）であった⁽⁶⁸⁾。しかし、景平元年（四三三）には北魏が洛陽を陥れる。元嘉七年（四三〇）には、到彦之が一時的に金墪城を奪回するが、同年中に再び北魏に奪還され、以後北魏領として太和一七年（四九三）孝文帝の遷都を迎える

ことになる。

以上、八王の乱以降洛陽は常に大規模な戦鬪下に置かれていたことから、都市が生活の場として成立しうる機能をほぼ停止していたと考えられる。しかしながら洛陽は後漢以来西晋まで三〇〇年にわたって首都が置かれた地であり、戦略上の重要性は存続しつづけた。洛陽という都市に代わって洛陽の戦略拠点としての機能を代行したのが金墪城であった。洛陽には金墪城以外にも陵雲台などの防衛施設が存在したが、実際には金墪城が単独で機能し、これをめぐって洛陽の攻防戦は繰り返されたのである。

(三) 北魏の洛陽建設と崩壊

北魏孝文帝は遷都の際、まず金墪城を修復し、ここに逗留する⁽⁷⁴⁾。これは前節で言及した金墪城を以て洛陽の代替とするという機能がそのまま活用されたことの反映である。

また、仮の宮城としても即時に使用することの出来る機能性を金墪城は有していたのである。

北魏の洛陽が後漢・魏晋の大城の外側にさらに都市を拡大し、坊条制を採用してその外周に外郭を設けたことは第一節で言及した。外郭の設置に伴って金墪城は都市の中心部に位置することとなり、宮城建設終了後は、金墪宮とし

て使用されることになる⁽⁷⁵⁾。

ときに本節で議論しておきたい点は、外郭をめぐる問題のなかで、旧大城外に展開する市街化区域が建設時にどのようなプランを以て立案されていたかという点である。もちろん旧都平城(現山西省大同市)の坊条制が採用されているが、大匠蔣少游が南朝蕭齊に派遣され、建康の京師・宮殿の階式を密かに調査している点も無視することは出来ない⁽⁷⁶⁾。完全ではないにしても建康の都市プランも参考にされていると考えられる。特に注目される点は、遷都時に外郭が設けられておらず、八年後の景明二年(五〇一)になってから整備されることである。当初、外郭のラインには、第一節で言及したごとく後漢代より都市の境域を示すラインが存在した。これを活用し、遷都時の都市の境域には外郭をもたない建康の郊の空間構想が採用され、その空間内に里が立てられていたことが、遷都以後八年という時間差の中で想定される。大城の外で積極的に市街地が営まれると、当然建康のごとく治安上、防衛上の問題が発生する。ここにおいて、里に坊が形成され都市の境域に外郭が整備されたと考えられる。この時点で山水に富んだ自然地形を利用する建康の都市のプランとは異なることになる。なお、その際の外郭の工事は数力月の工事であり、また発

掘調査でも明確にしたいほど保存状態も悪い(図二)ことから、堅固な外郭が設けられたとは考えにくい。⁽⁷⁶⁾ 牆垣もしくは若干これを強化した土牆を廻らしただけの簡素な造りであったと考えられる。これは外郭が建設当初のプランにはないことの証左ともなる。

ところで、都市境域としての外郭の近傍には建康のごとく常設の防衛施設は存在していない。郭門などの拠点は存在するが堅固な施設ではなく、またそれぞれがゾーンを形成したような形跡もない。建康の都市境域を取り囲む防衛構想は洛陽の都市プランの上では参考にされていないのである。北魏の洛陽において都市境域である外郭を基本にした防衛プランの成立がみられないことは注目に値する。

北魏の洛陽は、爾朱氏登場後の混乱の中で東魏・西魏への分裂を機に、その首都としての機能を喪失し、再び荒廃していくことになる。その荒廃の状況は、楊銜之が『洛陽伽藍記』を執筆する動機としてその序文に記すところである。しかし、いかに荒廃した状況下にあっても洛陽の軍事的・政治的な重要性は維持された。そして五胡十六国期と同様、荒廃した都市洛陽に代わり、再び金墪城が洛陽攻防戦の舞台となった。例えば、大統三年(五三七)年には独孤信が拠った金墪城をめぐる、東魏と西魏の攻防戦が展

開された。⁽⁷⁷⁾ また、隋末の李密の興亡の舞台となったのも金墪城である。⁽⁷⁸⁾ 第二節で言及した金墪城の機能が、北魏崩壊後そのまま復活している。金墪城以外に特別な防衛施設が洛陽には存在しなかったことは上述したが、首都機能を喪失した洛陽にとって、洛陽を代表するのは再び金墪城であった。金墪城には煬帝(位六〇四―六一八)に廃されるまで洛州総管が置かれていた。⁽⁷⁹⁾

小結

以上、魏晋の洛陽は、後漢に成立していた大城外の居住区域を踏襲して、大城の外に居住区域を形成していた。しかし八王の乱以降戦禍を被ることが多く、首都機能ばかりでなく都市機能の停止が長期間続いた。その一方で後漢以来三〇〇年の首都として、軍事拠点としての重要性は持ちつづけた。ここに首都機能・都市機能を喪失した都市洛陽に代わり、金墪城がその突出した防衛機能を発揮することとなった。大城の堅固な防衛力と城内の強化、そして金墪城の突出した防衛機能によって、洛陽では建康のごとく多くの防衛施設(城壘)の成立をみることはなかった。

北魏の洛陽は南北朝の戦時下において計画的に作られた都市である。その都市プランは旧大城外に外郭をもつとい

う特異性が指摘されていたが、その外郭のラインは後漢・魏晉の都市の境域をベースとして成立したものにはかならなかった。そしてまた、従来の都市境域の近傍には常設の軍事施設が設けられてはおらず、金墪城の存在をも含めて大城の要塞化のみが図られていた。これを北魏はそのまま活用した。したがって、その都市の境域も防衛構想も従来のものを踏襲する形であった。それ故に北魏崩壊後、五胡十六国期と同様に金墪城のみが残存し、洛陽の拠点としての意味を再び代行することになるのである。

結論

魏晉南北朝を代表する二つの首都機能を有する都市について、時間軸を追いながら都市空間とそこに展開される防衛構想に関する考察を行ってきた。以下、両都市を比較検討した上に見出される点を列挙してまとめたい。

一、建康は大城の外に展開する市街地を囲む外郭をもたず、都市の境域を区切るものとして籬門を結んだラインが存在した。そして都市境域全体の防衛には、自然地形の活用と拠点となる防衛施設を結ぶゾーンによる防衛ラインが整備された。ゾーンの形成は度重なる攻防戦の経験によるものである。そのゾーンによる防衛ラインが採用された背

景には、將軍府という地方政府の都市から王朝の首都へという政治的な発展、貴族制という社会構造をとることによる政府の弱体化、その一方で展開される経済・文化活動の発展と居住区・商業区の拡大というアンバランスな都市形成過程の問題があった。そして建康では宮城のみが堅固になり、市街地は境域と防衛ゾーンに囲まれた都市空間の中で拡大・発展して行くことになった。ゾーンによる都市防衛は、単に防衛上の問題にとどまらず、戦禍を被った都市の回復性の促進と平時の経済活動の発展に非常に有効なものであった。

二、石頭城は自然地形を利用した要塞という防衛機能の卓越性に加え、ゾーンによる防衛ラインを機能させる最も重要な拠点となった。石頭城を西の拠点として東府城―白石壘―新亭壘を結ぶ外側のゾーンと、秦淮岸―東府城―北籬門を結ぶ内側のゾーンとが、戦禍の経験をもとに成立していた。

三、石頭城と同様に大城防衛の機能を目的とした施設が洛陽にも設けられた。金墪城である。洛陽は建康と同様度高なる戦禍を経験するが、それが建康と異なる点は、首都機能(都市機能までも)を喪失するほど都市が荒廃してしまふことである。しかしながら、後漢以来三〇〇年にわ

たつて首都が置かれたという政治的・軍事的な重要性は変わらず、荒廃した都市に代わつて金墉城が洛陽の軍事的・政治的な機能を代行して行くことになる。北魏の洛陽において金墉城は都市の中心部に包含され、金墉宮として使用されるが、都市の崩壊後再び同前の機能が復活している。

四、都市空間の発展性という意味において、都市運営上の経験の産物としてゾーンによる防衛構想を確立させた建康は、都市としては卓越した存在であった。ある意味では自由な都市の発展を期待する現代都市にも共通するものがあるといえる。しかしながら、次代の隋唐の長安・洛陽には、北魏洛陽・北齊鄴城の都市プランが引き継がれて行くことになる。その一つの理由は、ゾーンは連携して機能するものであり、その一端が崩れると非常にしろいこと、もう一つの理由は、ゾーンの確立には長期継続的な都市運営の経験が必要なことである。

五、政治環境・自然環境の大きく異なる建康と洛陽という都市にあつて、石頭城は都市空間の総合防衛システムの一つとして機能し、金墉城は単独の防衛施設および都市代用の機関として機能した。その相異は、政治・自然環境ばかりでなく、都市空間の形成過程の問題と継続的な都市機能の有無に起因するものと考えられる。また、両都市が崩

壊した後、石頭城・金墉城ともに一地方の州廠が置かれる。それは、両施設が本来有していた防衛機能の卓越性と都市空間における存在の重要性によるものである。

六、都市を人間の営みの空間としてとらえたとき、魏晉南北朝期の都城は、都市が大城内で完結するものではなく、大城の外にも展開していた。その都市を内外の空間に分けるライン（境域）として、洛陽では郭（北魏では外郭）が、建康では郊が存在した。洛陽・建康ともに都市は境域の内側にあつて大城の内外に展開していた。しかし都市空間の防衛構想において、大城か都市かという点で両都市は大きく異なっていた。

以上、南北朝という時代を中心に、都市の生態の一面を見てきた。もちろん本稿で取り上げた洛陽と建康は首都クラスの都市であつて、同時代には鄴都・武昌などをはじめ、江陵・京口・広陵・襄陽・許昌・成都などの地方中心城市が存在する。史料的な制約という問題はあるが、社会構造をも踏まえつつ今後逐次検討していきたいと思う。その中では都市の境域と墓葬区との問題も取り上げていきたい。また、東アジア諸国家の同時代的な都市、例えば高句麗の平壤、百済の公州・扶余、太宰府なども石頭城・金墉城と形態的に類似する施設をもつことから視点に入れてい

きたい。紙幅の都合上各城壘の様相等割愛したところもあり、また十分な議論が尽せないところもある。諸賢のご叱正と賢慮を切に求めるところである。なお、本稿は中国都市研究会（一九九八年六月）発表の内容を原稿化したものである。

注

- (1) 石頭城：『吳志』卷二、金墪城：『水經注』卷一六穀水。
- (2) 石頭城：『隋書』卷三一地理志下丹陽郡、金墪城：『隋書』卷三〇地理志中河南郡。
- (3) 洛陽：『後漢書』卷一九郡国志引「帝王世紀」城東西六里十一歩、南北九里一百歩。同引「元康地道記」城內南北九里七十歩、東西六里十歩、爲地三百頃一十二畝有三十六歩、建康：『建康實録』卷二「建業都城周二十里一十九歩」。
- (4) 『六朝事跡編類』総叙門第一六朝宮殿では台城・東府・西州・倉城に触れた後、「宮室記云、皆不出都城之内」と台城の外の区域も都城と考えられている。都城については砺波護「中国都城の思想」（『日本の古代』九都城の生熊、中央公論社、一九八七）、宮崎市定「中国城郭の起源異説」（『宮崎市定全集』三 古代岩波書店、一九九一）を参照されたい。
- (5) 『太平御覽』卷一九七居処部二七引く「南朝宮苑記」。
- (6) 『景定建康志』卷二〇城闕志卷一古城郭。

建康石頭城と洛陽金墪城（堀沢）

- (7) 『建康實録』卷二。
- (8) 蔣贊初等「六朝武昌城初探」（『中国考古学会第五次年会論文集』、文物出版社、一九八五）。
- (9) 「河北臨漳鄴北城遺址勘探發掘簡報」（『考古』一九九〇年七期）。劉心長・馬忠理編『鄴城暨北朝史研究』（河北人民出版社、一九九一）。
- (10) 『建康實録』卷五、卷七。
- (11) 『晉書』卷七成帝紀、卷六五王導伝、『建康實録』卷七。
- (12) 陳明光『六朝財政史』（中国財政經濟出版社、一九九七）一三一―一四二頁。
- (13) 『南齊書』卷二、『梁書』卷二。
- (14) 建康の様相については以下の文献を参照されたい。
岡崎文夫「六代帝邑攷略」（『南北朝に於ける社会經濟制度』、弘文堂、一九三五）。
- 朱昶『金陵古蹟図考』（上海商務院書館、一九五〇）。
- 宮川尚志『六朝史研究―政治社会篇―』（平楽寺書店、一九五六）。
- 同済大学城市规划教研室編『中国城市建设史』（中国建筑工业出版社、一九八二）。
- 秋山日出雄「南朝都城「建康」の復元序説」（『橿原考古学研究所論集』七、一九八四）。
- 郭黎安「試論六朝時代的建業」（『中国古都研究』一、浙江人民出版社、一九八五）。

大室幹雄『園林都市―中世中国の世界像―』（三省堂、一九八五）。

羅宗真「対南京六朝都城的一些看法」（『中国古都研究』二、浙江人民出版社、一九八六）。

中村圭爾「建康の「都城」について」（『中国都市の歴史的研究』、唐代史研究会、一九八八）。

楊寛『中国古代都城制度史研究』（上海古籍出版社、一九九三）。

劉淑芬『六朝的城市與社会』（台湾学生書局、一九九三）。

李佶萍『中国歴代都城』（黒龍江人民出版社、一九九四）。

朱紹侯主編『中国古代治安制度史』（河南大学出版社、一九九四）。

『金陵十朝帝王州・南京卷』（《中国皇城・皇宮・皇陵》系列叢書、一九九四）。

なお、第二節の内容はその性格上上掲諸氏の研究と重なる部分もある。ご了承頂きたい。

(15) 『晋書』卷一五地理志下揚州、『晋書地理志新補正』卷五揚州。

(16) 劉淑芬前掲注（14）一四七―一四八頁。

(17) 劉淑芬前掲注（14）一二七頁。

(18) 『景定建康志』卷一六疆域志二鎮市。

(19) 羅宗真『六朝考古』（南京大学出版社、一九九六）一六―一八頁、『金陵十朝帝王州・南京卷』前掲注（14）二八―三三頁、李佶萍前掲注（14）八六頁、張承宗等主編『六朝

史』（江蘇古籍出版社、一九九一）九三頁。

(20) 前掲（14）参照。石頭成事は王族・重臣の領職が多く、石頭城の重要性を示すものといえる（表二）。

(21) 収集した記事は四五〇例を越えるが、表一の内容以外では前掲注（20）（表二）および瀟水の記事が主である。なお、表一に掲載した攻防戦の多くは戒嚴が布かれている。戒嚴の施行と都市防衛とは、密接な関係があることを物語っている。拙稿「北魏延興年間の軍事的動向―北魏戒嚴事例と延興六年六月の中外戒嚴に触れて―」（『軍事史学』三四卷四号、一九九三年三月）。

(22) 李佶萍前掲注（14）八六頁。

(23) 『景定建康志』卷二〇城闕志卷一古城郭。

(24) 李佶萍前掲注（14）八六頁。

(25) 劉淑芬前掲注（14）四七―四九頁。

(26) 『晋書』卷七三庾亮伝。

(27) 『宋書』卷二武帝紀、『南史』卷一宋本紀上、『景定建康志』卷二〇城闕志卷一古城郭。

(28) 『宋書』卷六一廬陵王紹伝、卷九五索虜伝、卷九九元凶劭伝。

(29) 『宋書』卷七前廢帝紀。

(30) 石頭、東府、新亭、白下を一組とする認識については岡崎前掲注（14）一〇九頁、宮川前掲注（14）五〇八―五〇九頁、秋山前掲注（14）二〇頁を参照されたい。

(31) 『宋書』卷九四阮佃夫伝。

表二 石頭関連職任官表

任官者	官名	出典	備考
曹植	鄧騎將軍、都督石頭水陸軍事	晉6	太寧元年
周札	右將軍、都督石頭水陸軍事	晉58	
于歆	征虜將軍、都督石頭軍事	晉70	
謝衡	給事中、成石頭	晉79	
謝弘	石頭督護	晉85	
謝安(孝武帝)	都督揚州軍事、征虜將軍、南州刺史、領石頭戍事	宋6	元嘉16年
謝安(孝武帝)	侍中、都督揚州五州諸軍事、征虜將軍、南豫州刺史、成石頭	宋5	元嘉17年
謝安(明帝)	冠軍將軍、南豫州下邳太守、領石頭戍事	宋8	(《世祖錄》)
向雄	冠軍將軍、高陽內史、魏都太守、領石頭戍事	宋45	義熙10年
劉劭	遼東將軍、領石頭戍事	宋45	(《大明記》)
孟懷玉	輔國將軍、領石頭兵、成石頭	宋47	義熙3年
劉劭	(《軍制將軍》)、領石頭戍事	宋49	
劉劭	給事中、太尉參軍事、龍驤將軍、高陽內史、領石頭戍事	宋49	
吳彤王暉	龍驤將軍、堂邑太守、成石頭	宋51	
吳彤王暉	龍驤將軍、領石頭戍事	宋51	義熙4年
吳彤王暉	征虜將軍、成石頭	宋51	(元嘉元年前)
徐嘉之	輔國將軍、丹陽尹、統石頭戍事	宋45	義熙10年
張永	護軍將軍、領石頭戍事	宋53	孝始6年
謝元	(征虜將軍)、領石頭戍事	宋61	元嘉8年
謝元	使持節、都督他州五州諸軍事、豫州刺史、左將軍、成石頭	宋68	元嘉7年
謝元	中護軍、中軍將軍、散騎常侍、領石頭戍事	宋68	元嘉9年
謝元	都督揚州諸軍事、冠軍將軍、南州刺史(不領)、領石頭戍事	宋72	元嘉17年
謝元	散騎常侍、領石頭戍事	宋72	元嘉28年
謝元	中護軍、領石頭戍事	宋72	元嘉28年
謝元	護軍將軍、領石頭戍事(不領)	宋77	(孝建元年前)
謝元	羽林監、領石頭戍事	宋78	
謝元	侍中、參軍將軍、領石頭戍事	宋79	元嘉26年
謝元	冠軍將軍、南豫州下邳太守、散騎常侍、領石頭戍事	宋79	
謝安王玄	征虜將軍、南豫州太守、領石頭戍事	宋80	
謝安王玄	右衛將軍(前)、成石頭	宋89	元嘉30年
謝安王玄	右衛將軍、領石頭戍事	宋91	
謝安王玄	侍中、領石頭戍事	宋93	昇明2年
謝安王玄	冠軍將軍、領石頭戍事	宋98	建武3年
謝安王玄	冠軍將軍、領石頭戍事	宋98	元嘉2年
謝安王玄	散騎常侍、領石頭戍事	宋98	永明9年
謝安王玄	散騎常侍、領石頭戍事	宋98	永明9年
謝安王玄	左衛將軍、侍中、領石頭戍事	宋98	永明7年
謝安王玄	江東王玄、行石頭戍事	宋98	
謝安王玄	中護軍、領石頭戍事	宋98	永明10年
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	建武元年
謝安王玄	將軍、領石頭戍事	宋98	永寧元年
謝安王玄	將軍、領石頭戍事	宋98	(建武元年後)
謝安王玄	將軍、領石頭戍事	宋98	永元2年
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	永元元年
謝安王玄	(征虜將軍)、丹陽尹、領石頭戍事	宋98	(永元元年後)
謝安王玄	中護軍、北中郎將、領石頭戍事	宋98	永元2年
謝安王玄	龍驤將軍、領石頭戍事	宋98	天監8年
謝安王玄	西中郎將、領石頭戍事	宋98	天監17年
謝安王玄	安右將軍、領石頭戍事	宋98	大同5年
謝安王玄	西中郎將、中護軍、領石頭戍事	宋98	(《魏書》)
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	天監2年
謝安王玄	侍中、中護軍、領石頭戍事	宋98	天監11年
謝安王玄	侍中、中護軍、領石頭戍事	宋98	天監9年
謝安王玄	侍中、將軍、領石頭戍事	宋98	天監元年
謝安王玄	侍中、將軍、領石頭戍事	宋98	天監10年
謝安王玄	中護軍、領石頭戍事	宋98	天監6年
謝安王玄	中護軍、領石頭戍事	宋98	
謝安王玄	右衛將軍、領石頭戍事	宋98	天監11年
謝安王玄	南兖州刺史、領石頭戍事	宋98	
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	天監8年
謝安王玄	宣毅將軍、領石頭戍事	宋98	天監16年
謝安王玄	侍中、龍驤將軍、領石頭戍事	宋98	晉通4年
謝安王玄	安右將軍、領石頭戍事	宋98	晉通5年
謝安王玄	征虜將軍、南州刺史、領石頭戍事	宋98	(太清元年前)
謝安王玄	宣毅將軍、領石頭戍事	宋98	晉通元年
謝安王玄	護軍將軍、領石頭戍事	宋98	大同3年
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	晉通元年
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	天監16年
謝安王玄	侍中、中護軍、領石頭戍事	宋98	大同7年
謝安王玄	侍中、中護軍、領石頭戍事	宋98	天監元年
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	天監13年
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	(天監13年後)
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	中大通3年
謝安王玄	征虜將軍、領石頭戍事	宋98	大明3年

<注> 晉一晉書、宋一宋書、齊一南齊書、梁一梁書、陳一陳書。

左側玉から劉劭への交代事例より成石頭一石頭戍事と理解する(今後要検討)。

なお、「石頭関」成石頭のみの記載は官名とは解し難いことから、上掲事例より狭く。

() は要検討事項。

(32) 『隋書』卷三一地理志下丹陽郡、「鎮江市東晉晉陵羅城的調査和試掘」(『考古』一九八六年五期)、「晉陵羅城初探」(『考古』一九八六年五期)。

(33) 漢魏洛陽城のプラン調査には以下のものがある。

「漢魏洛陽城初步調査」(『考古』一九七三年四期、監訳・

史料紹介『法政史論』二六号、一九九三年三月)。

「北魏洛陽外郭城和水道的勘査」(『考古』一九九三年七期)。

建康石頭城と洛陽金墪城(垣沢)

(34) 洛陽に関する主な研究を以下に挙げる(建康にも触れる研究を含む)。

服部克彦「北魏の首都洛陽城の構造」(『龍谷史壇』三八、一九五三)。

村田治郎「中国の帝都」(綜芸舎、一九八一)。

王仲殊「中国古代都城概説」(『考古』一九八二年五期)。

劉敦楨主編『中国古代建築史』（中国建築工業出版社、一九八四）。

大室幹雄『桃源の夢想—古代中国の反劇場都市—』（三省堂、一九八四）。

段鵬椅『漢魏洛陽城的幾個問題』（『中国考古学研究夏鼐先生考古五十年記念論文集』、文物出版社、一九八六）。

郭黎安『魏晋南北朝都城形制試探』（『中国古都研究』二、浙江人民出版社、一九八六）。

董鑒泓編『中国城市建设發展史』（明文書局、一九八九）。

朴漢濟、尹素英訳『北魏洛陽社会と胡漢体制—都城區画と住民分布を中心に—』（『お茶の水史学』三四、一九九二）。

大室幹雄『干渴幻想—中国中世の反園林都市—』（三省堂、一九九二）。

『河洛定鼎地・洛陽卷』（『中国皇城・皇宮・皇陵』系列叢書、一九九四）。

杜玉生、今津啓子訳『北魏洛陽城の形態の調査と復元』（『古文化談叢』三四、九州古文化研究会、一九九五）。

徐金星『關於漢魏洛陽故城的幾個問題』（『華夏考古』一九九七年三期）。

宮川尚志、同濟大学城市規劃教研室編、楊寬、劉淑芬、李侑萍以上前掲注（14）。

(35) 前掲注（3）。

(36) 楊寬前掲注（14）。

(37) 『後漢書』卷七二董卓伝。

(38) 『水経注』卷一六穀水、『太平寰宇記』卷三河南道三洛陽縣。

(39) 『晋書』卷一四地理志上司州、『晋書地理志新補正』卷二司州、『洛陽伽藍記』卷一・二（伽藍記では晋朝を中朝と記す）。

(40) 『魏書』卷八世宗記（『洛陽伽藍記』卷五では二二〇里とする）。

(41) 前掲注（34）。

(42) 『洛陽伽藍記』卷四。

(43) 『後漢書』卷四四楊震伝（几陽亭とする）。楊寬氏は郭門の性質をもつとする（楊寬前掲注14一四八頁）。

(44) 『太平寰宇記』卷三河南道三洛陽縣。

(45) 『洛陽伽藍記』卷四、『晋書』卷一〇二劉聰戴記。

(46) 『洛陽伽藍記』卷四。

(47) 楊寬前掲注（14）一二八頁及び一三五頁。

(48) 『後漢書』卷五六种嵩伝。

(49) 楊寬前掲注（14）一五三—一五四頁。

(50) 『東漢洛陽城南郊の刑徒墓地』（『考古』一九七二年四期）。

(51) 『永樂大典本河南志』後漢城闕古蹟。本文掲載の門亭のほか、皋門亭・宣德亭・長壽亭を合わせ九亭までが記載されている。

(52) 秋山前掲注（14）二三頁。

(53) 『永樂大典本河南志』晋城闕古蹟。

(54) 『漢魏洛陽城初步調査』前掲注（33）。

- (55) 『洛陽伽藍記』卷一、『水経注』卷一六穀水、『宋書』卷九五索廋伝。金墉城については北より甲・乙・丙城と記される。『水経注』の記載に従えば、甲城は洛陽小城、乙城は洛陽壘、丙城は金墉城となるが、甲城・丙城のどちらを金墉城とするかは、今後さらに検討を要する課題である。なお、三城が馮結した後は全体を金墉城と称していたと思われる。
- (56) 陵雲台は軍事施設としての性格をもつ(『晋書』卷二文帝紀)。
- (57) 『太平實字記』卷三河南道三洛陽縣。
- (58) 『漢魏洛陽城初步勘查』前掲注(33)。
- (59) 『晋書』卷五懷帝紀、『十六国春秋輯補』卷二前趙録二劉淵、卷三前趙録三劉聰。
- (60) 『晋書』卷七七蔡謨伝、卷一〇三劉曜戴記、卷一〇五石勒戴記、『十六国春秋輯補』卷八前趙録八劉曜、卷一四後趙録四石勒、『資治通鑑』卷九四晋紀一六。
- (61) 『晋書』卷九八桓温伝、『資治通鑑』卷一〇〇晋紀二一。
- (62) 『晋書』卷一一一慕容暉戴記、『宋書』卷六三沈演之伝、『十六国春秋輯補』卷二八前燕録六慕容暉。
- (63) 『晋書』卷一一一慕容暉戴記、『十六国春秋輯補』卷二八前燕録六慕容暉、『資治通鑑』卷一〇二晋紀二四。
- (64) 『晋書』卷一一三苻堅戴記、『十六国春秋輯補』卷三三前秦録三苻堅。
- (65) 『晋書』卷八一朱序伝。
- (66) 『晋書』卷一一七姚興戴記、『十六国春秋輯補』卷五一建康石頭城と洛陽金墉城(盧次)
- 後秦録三姚興。
- (67) 『宋書』卷二武帝紀、『晋書』卷一一九姚泓戴記、『十六国春秋輯補』卷五五後秦録七姚泓、『建康実録』卷二。
- (68) 『宋書』卷四五王鎮惡伝。
- (69) 『宋書』卷四少帝紀。
- (70) 『宋書』卷五文帝紀、『南史』卷二五到彦之伝、『資治通鑑』卷一一一宋紀三。
- (71) 『魏書』卷七下高祖紀。
- (72) 金墉宮への性格の変化については、段鵬椅前掲注(34)二四八～二五〇頁を参照されたい。
- (73) 『魏書』卷二太祖紀、卷一一〇食貨志。遼耀東『從平城到洛陽—拓跋魏文化転変的歷程—』(聯経出版事業公司、一九七九)一三六～一五八頁、張增光『平城宮造始末』(『中国古都研究』十、天津人民出版社、一九九七)。
- (74) 『南齊書』卷五七魏廋伝。
- (75) 『魏書』卷八世宗紀。
- (76) 『北魏洛陽外郭城和水道的勘查』前掲注(33)。
- (77) 『周書』卷一六独孤信伝、『北齊書』卷二神武紀。なお、北周の討斉時、金墉城には独孤永業が鎮している。『隋書』卷五二韓擒虎伝。
- (78) 『旧唐書』卷五三李密伝、『新唐書』卷八四李密伝。
- (79) 前掲注(2)。